

49 前身は海防艦 巡視船「おじか」型

海防艦とは日本海軍が海上護衛を主務として建造した基準排水量1,000トン程度の小型艦のことで、戦時下のため船型構造を簡易化し、量産を図った艦種である。とていつも甲、乙、丙型など各形式があり、このうち海上保安庁に在籍した5隻は1番船（生名、後の“おじか” PL-102）が日振型、2～5番船（竹生、同あつみ PL-103 / 鶴来、さつま PL-104 / 新南、つがる PL-105 / 志賀、こじま PL-106）が鶴来型に分類されるが、その差違はほとんどない。

5隻は当初いずれも戦後の復員輸送に従事し、1945年（昭和20年）12月になって掃海艦に指定されたが、掃海任務に就くには船型が大型すぎたようで、ほどなく掃海母艦となり、さらに掃海作業員の宿泊船としても用いられた。

気象衛星による観測など夢のまた夢だった当時、米軍は航空機による観測に加え、船舶による定点気象観測も行っており、空白地帯となっていた日本周辺の観測をわが国に求めてきた（ただし経費の大半はアメリカが負担）。これを受けて中央気象台は、まず1947年に北方定

点（X点、塩釜の東方約1,000キロ）観測を、翌1948年に南方定点（P点、室戸岬の南方約500キロ）観測を開始した。

この時観測業務の主力となったのが気象観測船凌風丸と上記の元海防艦5隻で、まず1947年に凌風丸が、翌年から整備成った元海防艦4隻（生名、竹生、鶴来、新南）が逐次観測業務に就き、1950年からは志賀も参入する。

定点観測船となる際、5隻には所要の改造が施され、船名にも「丸」が付けられて、ラジオ・ゾンデの打上げや気象観測を行なったが、荒天による激しい風波と動揺との戦いは極めて過酷な業務だったという。

サンフランシスコ講和条約発効後の1953年11月、米側の一方的な経費負担打ち切りにより定点観測はいったん中止となり、代わって台風襲来期の南方定点観測が自力で行なわれるようになるが、これを機に5隻は海上保安庁に移管され、1954年1月より新たな船名とともに巡視船としてのスタートを切った。

ただし、“おじか”と“あつみ”は引き続き定点観測業務にも就くことになり、“さつま”“つがる”はその予備船と

されたが、実際はこの4隻が交代で観測を行ない、やがて新造巡視船と交代した。

また巡視船“こじま”となった志賀は、定点観測船になる前に米軍の連絡船に改造されていたため居住設備が充実しており、海上保安大学校の練習船としてハワイへの遠洋航海を行なうなど、主に学生の教育・訓練に用いられた。

こうして活躍の場を幾度となく換え、戦中・戦後を生き長らえた元海防艦たちであったが、1962年4月～1966年6月に順次解役され、現役を退いた。

なお、“つがる”は巡視船としての役目を終えた後も石油開発公団の宿泊船としてボルネオで1970年代まで使われ、“こじま”も千葉市稲毛の海洋公民館として残されたが、惜しくも1998年1月に解体され、その勇姿は永遠に地上から姿を消した。



“おじか”型のネームシップ。下は千葉市の海洋公民館になった5番船“こじま”。（編集部 / 真山 良文）



Q 49 巡視船に転身した海防艦は何隻？

1 1隻

2 4隻

3 5隻

4 10隻